

情報社会論の存立機制

張江洋直・メディアと社会

●要約

本稿では、日常生活の世界において存立している信憑性構造と関連づけながら、「情報社会論」の存立機制を論じている。

情報社会論が語られてから、すでに30数年が経過している。それは、当初より現在まで、くりかえし「情報社会」が到来することを告げる。いい換えれば、それは社会変動への〈予言〉といってよい。たしかに、この30年間に私たちの諸技術は大きな進歩を遂げ、また、それらは人びとの日常の生活に普及している。現在語られるユビキタスコンピューティングに典型のように、それら普及された諸技術によって、私たちの生活も大きな変化をみせている。そうであるにも拘わらず、情報社会論は未だにその到来を物語り続けている。それは、なぜなのだろうか。むろん、それは諸技術が進歩し変化するからではない。

私たちがみるかぎり、「情報社会論」つまり「新しい技術」に触発されて展開されてきた諸議論は、社会的世界に生きる人びとがもつ〈社会変動への予兆〉という、人びとが現実規定をなす信憑性構造のゆらぎに、その存立機制の基盤を有している。

本稿では、「情報社会論の存立機制」を焦点化するために、第1に、社会学における現代社会論を、続いてM. マクルーハンのメディア論を中心に論じ、そのなかから技術決定論を含む多くの決定論的な思考を超える途を呈示したい。

●キーワード

情報社会

情報社会論

メディア論

技術決定論

社会決定論

信憑性構造

日常生活の世界

はじめに

「情報社会 (information society)」とはどのような社会なのだろうか。この名辞は社会学辞典などに載っているだけでなく、市井で用いられてからすでに久しい。それは1960年代後半から語られはじめたが、おそらく今日では「電子ネットワーク社会」へと置換したほうがより具体性をもって理解されるのかもしれない。だが、ここで私たちはこの概念をより積極的に定義づけたいのではない。むしろ、この造語を用いるさいに否応なく付随してくる〈社会変動への了解〉を問題にしたいのだ。それを総称的に「情報社会論」と呼ぶとすれば、その基本的な問題意識を端的に、「コンピューターの発達、普及を中心とする社会の情報化を、現代社会の革新的変動要因としてみる」(林 1993 : 748) と表わすことができる。それにしても、この発想のなにか、どのように問題となるのだろうか。

じっさい私たちは、コンピュータライゼーションの進行をすでに日常のいたるところで目にしているはずだ。それは、たんにパソコンの普及を意味するだけではない。さまざまな家電製品や電話、自動車……などなどにおいて、すでにそれは進行し、さらに増加傾向にある。その趨勢は、むしろコンピュータの偏在化とネットワーク化を意味するユビキタスコンピューティングというべきであろう。かつてはたんなる夢想であったものが、いまや実現されている。より具体的に語れば、携帯電話に端的に体现される移動体通信やインターネットの急速な普及……などが、人びとにある種の〈社会変動〉への感慨を抱かせるとしてもなんの不思議もないにちがいない。少なくとも携帯電話という道具が公共的である街路や車内などにおける人びとの振る舞い方を決定的に変化させたことは、既知の事柄に属している。こうした変化は、さらに広く深く進行するにちがいない。つまり、こうした新しい技術動向が多層かつ多様な仕方ではあるにせよ、私たちの日常生活の世界を変化させないはずはない。

こうして、日常的な諸経験が私たちに《現代とは大きな社会変動の時代である》という実感を与えている。むろん、こうした社会的な心性が成立する十分な根拠はあるだろう。いま、デジタル革命あるいは「IT (Information Technology) 革命」が進行している。それを「あらゆるものが電子テクノロジーによって再編成／脱構築される」(粉川 1993 : 8-9) 過程と捉えることができる。この命題は正鵠を射ている。だが、留意しよう。なぜならば、ややもすると、こうした了解からただちにやってくる新たな命題とは、「ITは社会を変える」というものだからである。しかし、それははたしてほんとうだろうか。これが本稿に一貫して通底する基本的な問題意識である。それをより端的に示せば、〈ITは社会を変えるか〉といえよう。そして、この点を明らかにすることが、相即して、情報社会論の存立機制そのものを照射することになるはずである。その真偽を、これからみきわめることにしよう。

1. 情報社会論と現代社会論

社会学には「現代社会論」という1つの独立した研究領域がある。情報社会論はそこに位置している。ここでは、この点の吟味をとおして、情報社会論の存立機制を考えることにしよう。

さて、そもそも社会学という学理には、「①関係性(ないし共同性)、②日常性、③現代性、④実証性、といった主要な特徴づけ」(西原 1991 : 6) がみられる。とはいえ、むろん社会学を特徴づけるこれら4つの焦点が社会的な諸研究のすべてに等質に顕現化しているわけではないし、また、その必要もない。というのも、これら4つの焦点は個々の学的営為による、いわば相互テキスト性として成立する〈社会学の世界〉を積分することによってはじめて顕現化するものだからである。それゆえ、現

代社会論は「現代性」という焦点をより鮮明化したベクトルによって構成されると、とりあえずは理解することができる。だが、「現代性」を捉える指標とはなにか。むろん、それは単一ではないはずだ。それゆえ、「現代社会論は、現代社会というものをどのように考えるかによって、さまざまな色合いの異なった特色をもつ」(矢沢 1993: 399) ことになる。

では、現代性を十全に把握するための具体的な指標とはなにか。「現代社会論として大衆社会論、産業社会論、管理社会論、知識・情報社会論、……世界社会論などよばれる理論」(矢沢 *ibid.*) を挙げるのが通例だろう。いい換えれば、そこで設定される指標とは、大衆化、産業化、管理化、情報化、世界システム化といったものだ。だが、留意しよう。というのも、現代社会論とは「時代診断」の意義を濃密にもつからである。そうであれば、このようにいくつもの指標がほぼ十年の間隔をおいて次々に登場すること自体に、どこか奇異な感触はないだろうか。現代社会が複雑性を本質とするのであれば、それに対応して、より複雑な、つまり複数の指標から現代社会を把握することはできないのだろうか。

むろん、それは可能だ。たとえば金子勇・長谷川公一は「産業化、都市化、官僚制化、流動化、情報化、国際化、高齢化、福祉化、計画化という9つのトレンド」(金子・長谷川 1993: i) を指標とする。これらに、さらに異なった諸指標を設定することも可能だろう。だが、現代社会論はその方途を採らない。それは、むろんさまざまな指標が成立しうることを前提にしつつも、もっとも中心とする指標で理論世界を被い尽くす。それを理論的な徹底性といってよく、そのことによってモザイク化された社会像を創りだす危険性を避けることもできる。だが、現代社会論がこうした複数の指標による分析と統合という方途を採らない主因は、それが本質的に直観的だからである。この点を少し敷衍しよう。

大衆社会論は大衆化という指標から、情報社会論は情報化という指標から現代社会を捉えることで成立する。だが、これらの諸指標は、たんに新たに生起する社会的な傾向性を指示しているだけではない。というのも、そこには必ず一定の歴史認識が独特の理論機制においてすでにつねに下図のようにはたっているからである。いい換えれば、これらが現代社会論の示す理論的な徹底性を担保している。

ここで歴史認識とは、たんに通常の歴史意識や歴史理解を意味するだけではない。たとえば、社会学の古典的知見であるF. テンニース (Ferdinand Tönnies) のゲマインシャフトとゲゼルシャフトという対概念はたんなる集団類型論ではなく、それぞれが前近代性と近代性とに対応した歴史了解によって裏打ちされている。大衆は公衆や群集とともに非組織的な集団類型であるだけでなく、市民(公衆)から大衆へという歴史的な転換を本質的な基軸とする。これが歴史認識が下図的に機能することの意味である。

産業化とは近代化と直接的に対応する概念であり、その汎用性は高い。それが現代社会論として語られうるのは、わが国の高度経済成長期がイエや村落に端的にみられる従来からの共同体的特質を弛緩ないしは変形・解体させていく過程に対応しているとする歴史了解がそこにすでに成立しているからである。また、管理化が語られるためには、その言説を統制する基準として〈自立した個人が活躍する市民社会〉が理念化され、理論的な基準とすることなしには成立しえないだろう。いい換えれば、一定の〈自由を享受する状態〉を了解地平とすることなしには、こうした議論はそもそも成立不能である。

このように、現代社会論はたんに新たに生起する社会的な傾向性、たとえば技術革新を体現するというよりは、むしろ人びとがそれを1つの時代的な転換として予期する信憑性構造 (plausibility structure) の強度とゆらぎに明確に対応する仕方 で成立するといえよう。ここで信憑性構造とは、そこで生きる人びとにとって「もっともらしい (plausible) と感じる現実規定」(Berger & Kellner 1981=1987: 87) の意味である。それゆえ、現代社会論は常識的推論からする変動の予兆を基盤としているといい換えることができる。むろん、現代社会論が直観的であるとは、それを人びとが直感的に受容することと対応する。

現代社会論はもとより、こうした常識的推論といえども、こうした場合には歴史認識が下図として作動している。その機制を把握するために、一見するとまったく歴史を語っていないようにみえるある言説を事例として、この問題を考えておこう (1)。

来る「情報社会」は、まさに「待つ」という価値観とは正反対の、スピードに価値がおかれる社会である。情報機器の発達が可能にした情報手段は、空間的距離による時間的ハンディを完全に克服し、誰もが全世界と同時通信できるようになった。……あまりにスピード化された社会の中では、人間はますます非人間化するばかりではないか。(須賀 1998: 47-48)

ここで注目したいのは情報社会の到来云々にではなく、「人間-非人間」の語用法にある。ここで問いたいのは〈人間とはなにか〉ではなく、この語用法が〈本来的な人間〉という前提をすでに想定していることである。だが、この理想像はどのような根拠で構成可能なのだろうか。おそらく、それを「一言にして云えば『自然法的人間』にほかなるまい」(廣松 1968: 72)。では、こうした言説に端的に顕れる問題点とはなにか。それは人びとの〈現在への不満や不安〉を虚空へと投射させることにある。現在的に生起する〈不満や不安〉は、むろん人びとの時代的な転換を予期する信憑性構造の強度と明確に対応しているだろう。たとえば、1960年代以降に社会学にも多大な影響を与えた疎外論的言説はそれを過去へと投射することによって、未来へとすすむ〈回復の物語〉を紡ぎだす。では、未来学はどうだろうか。そこにあっては、現在の〈不満や不安〉が未来に投射されることによって現在は未来から規定され、そこが基準となる。こうして、じっさいには現在において成立する〈不安〉や〈変動の予感〉に代わって、未来という基準が現在に君臨する理論機制あるいは歴史認識が完成する。だが、そこでは、〈現在の不満や不安〉は吟味されないままなのだ。先に私たちが現代社会論は〈変動への予兆〉を基盤としているというのは、こうした意味においてである。すでに明らかなように、情報社会論はこうした社会的心性に対応した理論機制によって拓かれる認識空間のなかに存立している。

2. 情報社会論の系譜

(1) 情報社会論とメディア論

ここでは、情報社会論の系譜を簡単に触れつつ、現在的にみて必須といえるメディア論的視点についても把握することにしたい。そこで、まずは干川剛史の論考を手がかりとしよう。かれは田崎篤郎・船津衛 (田崎・船津 1997: 10-42) に全面的に依拠しながら、情報社会論の系譜を的確に描いている (干川 1999: 222)。それを以下で簡略化して確認しておきたいとおもう。

- ①情報経済論的情報社会論：情報社会論の起源に当たる。
- ②文明論的情報社会論：未来論的、観念論的、文明史論的に情報化と社会変動の関連が論じられている。
- ③政策論的情報社会論：政府の情報化政策を裏付けるものとして行政の側から呈示された議論。
- ④日本文化論的情報社会論：日本の伝統的文化が、情報化の進展にとって有利に働くという議論。
- ⑤社会批判論的情報社会論：情報社会の現実を批判的な視点を取り入れながら現状分析をしようとする議論。

以上5点は通時的な系譜として描かれながらも、じっさいにはその初期①②においてはとくに相互嵌入の相貌をみせている。干川はこうした系譜を示しつつ、「今日の情報社会論」として「市民、企業、情報工学、学際的研究」(ibid.:223)の4点を挙げる。これはよく鳥瞰された図式といつてよいが、残念ながらメディア論的視点が完全に欠落しているという難点がある。また、現代社会論との関連で捉えるならば、注視すべきは②以降といえよう。たとえば、矢沢は、「70年代の中頃から70年代末までは知識・情報社会論が……注目を浴びた」(矢沢1993:399)と確言する。そこでもっとも影響を与えたのは、1973年に刊行されたD. ベル (Daniel Bell) による『脱工業化社会の到来』である。それは情報社会論の古典といわれるに相応しく、ベル自らの「イデオロギーの終焉」論を継承しつつ、1960年代を通じて先進社会(現代社会)が財の生産からサービスへとその経済的な中心を移行させ、産業社会=工業社会(近代社会)から情報や知識・サービスに社会的力点を置く脱産業社会(post-industrial society)へと離陸しようとしているというものである。そこには、理論的知識の優位や専門・技術階級の成立といった、社会工学的な社会像の構成にとって重要な契機が織り込まれているとはいえ、その基本的な議論図式はいたって明瞭である。この時期が情報社会論の黎明期であり、ベルに典型的な脱産業社会論はそれ以降の情報社会論の基本的な枠組を形成したといえよう。

だが、留意しなければならない。というのも、村上陽一郎によれば「information society (情報社会)」という、今日では英語圏で普通に用いられているこの名辞自体は、そもそも1960年代後半に林紘一郎らによって流布された和製英語であるという。かれによれば、こうした新たな思潮台頭の背景にはベルとともにM. H. マクルーハン (Marshall H. McLuhan, 1911-1980)がいる(村上1999:136-7)。そうであれば、情報社会論にはメディア論的視点をも含めるのが順当であろう。じっさい、マクルーハンは1960年代に時代の寵児であり、その影響力は研究者集団の域を超えた1つの社会現象と呼びうるものだったはずだ。それが、1970年代への推移とともに死んだ犬のごとき扱いを受け、情報社会をめぐる視界から消失する。おそらくこの評価の落差は、テレビや電話に典型的な電気メディアの大衆的な普及に伴って、かれの過剰ともいえるオプティミスティックな言説が人びとの信憑性と決定的な齟齬を来したからではないかとおもわれる。

マクルーハンは「メディアはメッセージである」(McLuhan 1964=1987:14)と語った。この言辞は、シャノン・モデルが支配的であった1960年代以降だけでなく、今日においてもなお鮮烈かつ衝撃的である。シャノン・モデルとは、C. E. シャノンらによって提唱された通信の数理モデルである。それは、情報源・送信機・メッセージ・通信路・受信機・受信地という六つの構成要素からなる(Shannon and Weaver 1964=1969:46)、「おそらく、もっとも影響力のあるコミュニケーション・モデル」(McQuail 1975=1979:22)とみなされてきた。いい換えれば、それは1980年代にメディア論的な議論地平が形成され、

いわばマクルーハン・ルネッサンスが生じるまで広く一般的であった旧来型メディア観の典型といつてよい。そこでは、メディアは情報のたんなる「通信路」にすぎない。だが、マクルーハン理論はそれと決定的に異なっている。

つまり、この命題は、「メディアそのものが、それが運ぶメッセージとは独立にもっている……人間の経験と関係を構造化する力を言い表したもの」(浜 1996: 98) と理解することができる。いい換えれば、マクルーハン理論にはたんにメディアという経験の領域を問うだけではなく、さらに人間経験の可能性の条件として〈メディア性〉を問う理論的な志向性をみることができる(張江 1999)。とはいえ、それが為されるためには、じっさいに20有余年という歳月が必用であった。だが、それはいったいなぜか。それを理解するためには、メディア論的な視点のじっさいの生成過程を概観しておかなければならない。それは同時に、情報社会論の系譜を理解するためにも必須であるだろう(2)。

我が国の社会学にあって吉見俊哉や若林幹夫とともにメディア論的思潮を深化させてきた水越伸は、1993年に「メディア論は、新しい領域だ」と確言する。かれによれば、「メディアがそれ自体として対象化され、批判的検討をなされるようになってから、せいぜい10年程度しかたっていない」(水越 1993: 58)。そうだとすると、1970年代とはメディア論も含めた情報社会論にとって空白の時代を意味するのだろうか。むろん、そうではない。だが、そこには1つの〈ねじれ〉が存在する。それを端的に示しているのが、1970年代にもっとも目を引く「ニュー・メディア論」の登場である。

ここで「ニュー・メディア」とは、新しい電子メディアを意味する。つまり、その議論は新しい技術に触発され、そこに焦点化されている。水越によれば、ニュー・メディア論は、「官庁や財界、メディア業界のポリティカルな力学のなかから噴出し、研究者もまたその議論のステージに便乗することでとりざたされた」(水越 *ibid.*) という。この点を若林は的確にまとめている。ニュー・メディア論とは、「一九七〇年代から八〇年代半ばまで」にみられたものであり、「電子的な情報通信技術の高度化と社会の関係をめぐる議論……の焦点は……新しい電子情報通信メディアが社会にもたらすであろう新たな便益をめぐる未来像の構築に据えられていた」(若林 1993: 46)。いい換えれば、こうした〈新しい技術に触発された未来学〉といった視点から解放され、メディアが人びとの経験にもつ本源性を議論の俎上に載せるようになるのは1980年代半ば以降のことである。私たちはこうした議論の推移を、若林に倣って〈ニュー・メディア論からメディア論への転換〉といういささか逆転したいい方で述語化しておきたいとおもう(若林 *ibid.*) (3)。

(2) メディア史観という地平

情報社会論がベルに典型的な脱産業社会論をその基本的な枠組としていることはすでに触れた。むろん、それも1つの歴史認識を伴っている。周知のように、産業社会は近代社会の経済的側面を表わしており、そこには、農業社会→産業革命=産業社会→情報革命=情報社会といった一連の社会発展段階への了解が地平的に含意されている。だが、近代社会を政治的な指標でみるならば、近代社会=市民社会と現代社会=大衆社会という区別と連関を措定できるだろう。その場合に、市民社会を実現する契機である市民革命と本源的に対応する〈大衆革命〉はみあたらない。それゆえ、現代の大衆社会的状況は市民社会的な諸制度・内実の継続的な〈内的変容〉によって構成されていると捉えられることになる。では、情報社会はどうだろうか。それをもっとも広領域な歴史的包括性をもって呈示し

ているのはマクルーハンである。それはメディア史観と呼ぶに相応しい。

いかなる技術も新しい人間環境を創り出す傾向がある……。文字とパピルス紙は……古代世界の諸帝国にとって欠くべからざる社会環境であったと思われるものを用意したのだった。また馬のあぶみと車輪とは、たいへんな規模をもつユニークな環境を創り出した。技術的環境というものはひとびとをただそのなかに住まわせるというだけの受動的な容器にとどまるものではない。それはひとびとを作り直し、他の技術をも更新する能動的過程なのだ。

(McLuhan 1962=1986: i)

ここで少し註解しよう。マクルーハンが語るメディアとは「われわれ自身の拡張したもののこと」であり、それは「新しい技術」(McLuhan 1964=1987: 7) を意味する。たとえば「衣服は皮膚の拡張であり」(ibid.: 120)、「機械化」とは「人間の外なる自然あるいは人間の内なる本性を、増幅させ特殊化した形式に移し変えたものに他ならない」(ibid.: 59)。簡略化すれば、マクルーハンの「メディア論は、メディアの技術的な変化がそのまま人間自体を変化させるという発想」であり、「道具が手の延長であるように、活字メディアも電子メディアも、人間の延長だという」(小阪 2000: 31)ことになる。かれの技術観は技術を単純に〈人間的な諸経験の拡張〉であるとあまりにも素朴に考えている点に問題があるのだが、そうであるにも拘わらず、技術を徹底して〈人間的な諸経験との相関〉の内に捉えようとする視点はいまなお重要である。その要点は、人間的諸力の外化と環境の内化という相互規定的な関係にある。かれは、ここからメディア史観を紡ぎだす。『ゲーテンベルクの銀河系』の著者であるマクルーハンはむしろ印刷技術に、そして電気メディアにも多大の注意を払う。とはいえ、かれの歴史観の要諦は社会的に中心的なコミュニケーションメディアにある。概していえば、それは、①聴覚系メディア(話し言葉)→②視覚系メディア(文字、特に表音文字)→③電気メディア(電気通信)というメディアの発展段階説を基本にする。だが、留意して欲しい。これが、たんなるメディア発展段階説であれば、問題は少なく済むだろう。だが、それが人類史と同値されるとき、そこに1つのオトギ話が生まれることになる。その〈物語〉の主人公は、人間的諸力と環境との弁証法ではない。その基底にあるのは、アナログカルな直観力に支えられた技術決定論である。それを簡略に概観し、問題の所在を明確にしておこう。

技術とはある種の知を別の様式に移し変える方法である。……メディアの力が経験を新しい形式に転換するのを見れば、いっさいのメディアが活発なメタファーであるといえる。話されたことばは人間の最初の技術であった。……ことばは一種の情報検索の道具であって、人間の環境と経験の全体に高速度で及ぶものだ。ことばはメタファーとシンボルの複雑なシステムであって、……外化の技術である。……この電気の時代にいたって、……人間は、ますます情報の形式に移し変えられ、技術による意識の拡張を目ざしている。……われわれは、拡張された神経組織……つまり、電気のメディアを用いることによって、一つの動的状態を打ち立てた。それによって、これまでの、手、足、歯、体熱調節器官の拡張にすぎなかった技術が、……すべて情報システムに移し変えられるであろう。(McLuhan 1964=1987: 59-60)

結局のところ、マクルーハンの壮大な物語は各身体部位＝機能と各技術との安易なアナロジーに支えられているにすぎない。かれの『メディア論』では、衣服、車輪、自転車、自動車といったアイテムも印刷、新聞、電信、電話、ラジオ、テレビなどと同一平面に扱われている。だが、電気メディアや電子ネットワークは、はたして拡張された神経組織だろうか。たしかに、それらを情報が往来する。そこに同一性はある。だが、この暗喩的な修辞法の向こうに、頭脳は存在するのだろうか。それはどこか。たとえば、盲人の杖が地面の微細な凹凸を感受するのを知るとき、そこに身体の伸張をみることができ。だが、個性性を共同性と無媒介的に同値することは不能であるばかりか、そもそも〈共同的な身体〉を具体的にイメージすることは可能だろうか。管理社会として描かれた近未来社会に登場するマザー・コンピュータがそれにあたるとでもいうのだろうか。

むろんマクルーハンは、そんなディストピアを語らない。かれの言説はいたってオプティミスティックだ。「われわれの中樞神経組織を電気磁気技術として拡張あるいは転換したら、われわれの意識をコンピューターの世界に転移させるのもあと一段階にすぎない。そうなれば、われわれは意識をプログラムすることができるであろう」(ibid. : 64)。

じつは、かれのこうした安易なアナロジーを支えているのが技術決定論である。くりかえしになるが、マクルーハンの議論は、人間的諸力の外化と環境の内化という相互規定的な関係を動的に捉えようとする志向に満ちている。だが、そうであるにも拘わらず、その基本は技術決定論といわざるをえないだろう。

われわれがここ数世紀の間、「国民」の名で呼んできたものはグーテンベルクの印刷技術が出現する以前に発生したことはなかったし、また発生する可能性もなかったのである。そして、それと全く同じ理由から、地球上のすべての成員を巻き込んで呉越同舟の状態にしてしまう力をもつ電気回路技術が到来した今日以後、そうした旧来の「国民」は生きのびることができないであろう。(McLuhan 1962=1986 : i i)

聴覚メディアは経験の全体性と小規模で親密な部族社会をもたらす。視覚メディアは画一性と記録性をもつがゆえに中央集権的な社会とともに、視線の極である個人を共同体から析出する。印刷技術は文字の特性を社会全般に延長することで、画一化し均質化した個人＝国民と代替可能な構成要素からなる官僚制組織を析出する。つまり、「印刷メディアが近代をつくる」(西垣 1999 : 169)。ところが、電気メディアは音声を電氣化して伝える地球規模に拡張された神経組織であることから、人びとは脱個人化され、経験の全体性が回復するとともに、「地球という全体を、人類という家族を、単一の意識に仕立て上げること」(McLuhan 1964=1987 : 64) が可能となる。

マクルーハンの包括的ではあるがやや錯綜した議論を単純化してまとめれば、以上のようなになるだろう。だが、こうした記述内容は妥当だろうか。むろん、それは正鵠を射てはいない。たしかに、メディアが環境を形成するにしても、メディアの具体的で社会的な存立様態は、「複合的で重層的な社会の諸力の錯綜した結果」(水越 1996 : 187) と考えるべきだからである。いい換えれば、マクルーハンの理路はそこで問うべき課題を暗喩的修辞法で飛び越えてしまうことで、結局は技術決定論の域を一步もでてはいない。

3. 技術決定論と社会決定論の問題性

ここでは、「技術が社会を変える」と定式化できる技術決定論がもつ問題性を確認したい(4)。結論から述べれば、この命題は妥当性をもたない。まずは、こうした発想が生起する理由の確認からはじめて、その根拠を十全に理解することにしよう。

水越によれば、「メディア論は最初の段階では、どうしても技術決定論……的な傾向を持つ」(吉見・水越 1997:175) という。その理由は、すでに「ニュー・メディア論」を概観したさいに確認してあるように、メディア論や情報社会論が新しいメディアや技術の登場に触発された議論だからである。だが、「触発される」とはどのような事態なのだろうか。いい換えれば、問題はここで触発されるのは、だれか、である。むろん、それは「新しい技術」を「新しい」と了解可能な技術者や研究者であるにちがいない。だが、「新しい技術」はそうした人びとをつねに「触発する」とは限らないはずだ。そうだとすると、こうした「触発」が成立するためには、そこにはたんに「新しい」という必要条件だけでなく、他の十分条件が存立していなければならない。では、それはなにか。じつは、ここが要諦である。そこで、この点を黒崎政男による適切な問いとともに考えてみよう。

「新たな技術革新は、時代を大きく変化させる」。しばしば耳にするフレーズである。しかし、……なにか新しいテクノロジーが開発されると、それは必ず社会に定着し、社会を変化させる、という発想は、本当に正しいのだろうか？ (黒崎 1999: 18)

黒崎は、佐藤俊樹による技術決定論批判(佐藤 1996)を手がかりとしつつ、「技術決定論と社会決定論の問題は、メディアの問題を考えるにあたって、まず最初に十分検討されなければならない」(黒崎 *ibid.*:19) という。むろん、ここでの「メディア」は情報技術に置換可能である。前者は「社会の動きを変えていくのは技術なのだという発想」(*ibid.*:18)を、後者は「社会のしくみのほうが、技術の使用方法を決定すると考える立場」(*ibid.*:19)を意味する。かれは、これら2つの議論の構造的な類似性を問題にする。つまり、両者は「おそらく同じ欠陥を有している……。それは、両者とも最初に社会と技術をそれぞれ独立の項として捉えて、そのあとで優劣関係・影響関係を論じるという構造になっている点である」(*ibid.*:27)。この論定はもっともなものだが、さらに後論との関係上、ここで通常は「技術予測」として語られる問題系への黒崎による解題的な作業を一瞥しよう。かれはそれを「技術実現予測」と「技術普及予測」とに分離する。前者は技術者や研究者によって為される「技術そのものについての予測である」(*ibid.*:21)。それゆえ、それはただちに社会過程に関与しない。留意すべきは後者である。

この技術がいくらまで安価になればこの程度普及する……といった言説は……技術……予測しているように見えて、……人々の欲望や購買行動は変わらないから、……安くなれば買う……ことを前提にしている。つまり、技術普及予測は技術の予測をしているように見えて、じつは……社会の構造が変わらないとか、社会の構造がこのように変わっていくという……認識がなければ……不可能なのである。(黒崎 *ibid.*:21)

ここにおいて技術決定論の理論的な欠陥が顕になる。というのも、〈社会の動きを変えていくのは技術である〉とする基礎命題はここで自らを裏切るからだ。いい換えれば、「技術普及予測」をなんら想定できない、あるいは想定しなくても済ませられる技術決定論は成立不能である。なぜならば、〈社会の動きを変えていく〉ためには、その技術は必ず普及しなければならないからである。つまり、秘儀的な技術がそのままの社会的な存立様態であるならば、それに〈社会の動きを変えていく〉可能性はまったくない。

では、他方の社会決定論の問題性とはなにか。端的に言って、この思潮の存在意義は時代の寵児たる技術決定論への対抗にある。とはいえ、厳密に言えば社会決定論はそもそも自家撞着に帰結する宿命を本質としている。なぜならば、それは自らが現われる文脈、つまり人びとの信憑性構造の強度と対応する仕方的感受される〈社会変動の予兆〉と必ず齟齬を来たすからである。それゆえ、黒崎は社会決定論に寄り添いながらも、「技術の社会性」と「社会の技術性」(黒崎 *ibid.* : 26) に着目することで、その難点の超克を提唱する。

技術が無関係に社会から独立していて、勝手に技術開発が行なわれるわけではない。しかし、逆に、社会機構が最初でありきかという、そのときどきの……テクノロジーから離れて社会機構そのものが独立して存在しているわけではない。[中略] ……まず議論の出発点として確認しておかなければならないことは、技術と社会の重層的な構造、内的連関を見定めることである。(黒崎 *ibid.* : 29)

ここで黒崎が示す論点はきわめて穏当なものだろう。それを図式化していえば、いかなる決定論もその論理機制のままでは社会的リアリティの複雑性に対応できない。そのために、「技術の社会性」と「社会の技術性」という〈複数の記述の仕方〉が要請される。かれはこう語っている。この論点をメディア美学のN. ボルツ (Norbert Bolz) に拠って明確化すれば、その理路は次のようになるだろう。「複雑性とは全体が不透明だということだから、透明であること、明確であること、率直であることに対する憧れが至るところで生まれる」(Bolz 1997=1998 : 8-9)。すでにみた2つの決定論は、こうした憧れの結晶の1つにすぎない。それゆえ、そうした言説には、「そんなに簡単な話ではないのでね」(*ibid.* : 8) といった言明がただ対置されることになる。だが、むろん、こう眩くことでなにかが解決されるわけではない。そこでは、ただ、決定論に体现される〈大きな物語〉の代替物になにがしかの歯止めがかけられるだけなのだから。

私たちはすでにこうした決定論の生起が「新技術」に触発されたものであることを確認している。だが、「触発」が生じるためには、むろん「新技術」に呼応しうる地平的な了解が不可欠である。それは、「新技術」をそれとして了解しうる技術的な知識地平だけでない。さらに〈透明性への憧れ〉という地平が成立しているのでなければならぬだろう。すでにみた現代社会論の直観性を大衆的に担保しているのも、この〈透明性への憧れ〉であるといってよい。それを、社会過程の複雑性が人びとの信憑性構造において〈より透明で、明確で、率直な物語〉の生誕を促すといひ換えることができる。端的に言って、語り部は、すでにつねに聴衆によって基底的に規定されているのである。

おわりに

ところで、〈普及する〉とはどのような事態なのだろうか。むろん、それは「ひろくいきわたること」を意味している。それゆえ、技術の具体的で社会的な存立様態が「複合的で重層的な社会の諸力の錯綜した結果」である以上、たとえどのように優れた「新技術」であろうとも、それだけで普及するとはかぎらないといえよう。では、普及の鍵を握るものとはなにか。むろん、それも複雑な過程を経ている。だが、その主因は明確である。少なくとも、ある「新技術」が普及するとすれば、それは必ず人びとの信憑性構造に適ったものである。むろん、信憑性構造は不動ではない。むしろ、それは時代とともに変化する。だが、そうであるにも拘わらず、人びとによって〈選ばれた〉ものだけが普及するということができる。これは、あまりにも自明な結論だろうか。しかし、いかなる「新技術」であろうとも、その社会的な存立様態はすでにつねに大衆的な《使用者》によって基底的に規定づけられているのである。

さて、〈ITは社会を変える〉ののだろうか。すでに明らかなように、この命題は妥当性をもたない。それは、錯綜した複雑な社会過程を問わず、人びとの信憑性構造を視野に入れないまま、そこで生起する〈変動への予兆〉に立脚し自らが新たなオトギ話であるとともに、さらに新たな物語を紡ぎだす。しかし、原因と結果とはそもそも代替不能であるはずだ。むろん、複合的で重層的な社会的諸力の錯綜した社会過程にあっては、〈原因-結果関係〉そのものが複雑な連鎖をなしている。そうであれば、そうした社会過程の結果として現出する〈社会変動〉への解明もまた、至難の業といわなければならないのかもしれない。だが、たとえそうであるにせよ、そこで暮らす人びとによって「もっともらしいと感じる現実規定」を注視する視圏において、必ず契機とすべき理路の出立点は与えられるにちがない。「すべての発端は任意のもの」であれば、問われているのは、たんにさまざまな「新しい技術」の華々しい動向にではなく、むしろ、それらを入びとが〈どのようなものとして受容し、用いていくのか〉を注視することにある(5)。

●註

- (1) こうした疎外論的な論理機制そのものへの根底的な批判に関しては、廣松（1968）の参照を願いたい。また、不十分なものではあるが、情報社会論との関係のなかで、この主題に触れている拙稿（張江1998）も参照していただきたい。
- (2) マクルーハン理論は、それまでのメディア研究が示した〈メディアという経験の領域〉の研究から、〈経験におけるメディア領域〉あるいは〈経験のメディア性〉の研究へと、メディア論の地平そのものを大きく深く転轍させる可能性を拓いたとみることができる。この点に関しては、浜（1993：1996）あるいは拙稿（張江1999）を参照していただきたい。
- (3) 「ニュー・メディア論」から「メディア論」への転換に関しては、若林（1993）に加えて、拙稿（張江2000）の「1. メディア研究の深化」を参照していただきたい。
- (4) 技術決定論あるいは社会決定論の問題性に関しては、拙稿（張江 2000）の「2. 〈透明であることへの憧れ〉」でより詳しく検討を加えているので、そちらを参照していただきたい。
- (5) 本稿執筆にさいして、草稿段階で井出裕久氏（大正大学）、佐野正彦氏（鹿児島国際大学）、大谷栄一氏（財団法人 国際宗教研究所）の三氏に貴重なご教示をいただいた。また、本学の南満幸教授には英文要約作成にさいしてご指南をいただいた。この場を借りて、記してお礼を申し述べたい。

●文献

- Bell D. 1974 *The Coming of Post-Industrial Society*, Basic Books. = 1975、内田忠夫ほか訳『脱工業化社会の到来』上・下、ダイヤモンド社.
- Berger P. L. & H. Kellner
1981 *Sociology Reinterpreted*, Anchor Press. = 1987、森下伸也訳『社会学再考』新曜社.
- Bolz N. 1997 *Die Sinngesellschaft*, Econ Verlag. = 1998、村上淳一訳『意味に飢える社会』東京大学出版会.
- 浜日出夫 1993 「マクルーハンの銀河系」『情況』1993年7月号、情況出版 67-81.
- 浜日出夫 1996 「マクルーハンとグールド」『メディアと情報化の社会学』岩波書店 97-112.
- 張江洋直 1998 「「情報文化」における〈歴史的現在〉と近代性」『現代社会理論研究』第8号（現代社会理論研究会編）人間の科学社 234-241.
- 張江洋直 1999 「経験とメディア」『稚内北星学園短期大学紀要』第12号 17-28.
- 張江洋直 2000 「リアリティとメディア」丸山不二夫編『情報メディア論』八千代出版 127-143.
- 張江洋直 2001 「メディア変容と〈マス・リテラシー〉」『稚内北星学園大学紀要』第1号 1-15.
- 林 進 1993 「情報社会」『新社会学辞典』森岡清美ほか編、有斐閣 748.
- 廣松 渉 1968 『マルクス主義の成立過程』至誠堂.
- 千川剛史 1999 「情報社会論再考」『情況』1999年12月号別冊、情況出版 218-232.
- 金子勇・長谷川公一
1993 『マクロ社会学』新曜社.
- 小林宏一 2000 「メディア変容の現在」山崎正和・西垣通編『文化としてのIT革命』晶文社 82-94.
- 粉川哲夫 1993 「トランスミッション」『情況』1993年7月号、情況出版 6-15.
- 小阪修平 2000 『現代社会のゆくえ』彩流社.
- 黒崎政男 1999 「メディアの受容と変容」黒崎政男監修『情報の空間学』NTT出版 13-40.
- McLuhan M. 1962 *The Gutenberg Galaxy*, Univ. Toronto Press. = 1986、森常治訳『グーテンベルクの銀河系』みすず書房.
- McLuhan M. 1964 *Understanding Media*, McGraw-Hill. = 1987、栗原裕・河本仲聖訳『メディア論』みすず書房.
- McQuail D. 1975 *Communication*, Longman Group Limited. = 1979、武市英雄ほか訳『コミュニケーションの社会学』川島書店.
- 水越 伸 1993 「メディア論の混沌」『情況』1993年7月号、情況出版 57-66.
- 水越 伸 1996 「情報化とメディアの可能的様態の行方」『メディアと情報化の社会学』岩波書店 177-196.
- 村上陽一郎 1999 「日本社会と情報化」『情報の空間学』所収 136-147.
- 西垣 通 1999 『こころの情報学』ちくま新書.
- 西原和久 1991 「社会学理論の現在」西原和久・張江洋直・佐野正彦編『社会学理論のリアリティ』八千代出版 1-20.
- 奥野卓司 2000 『第三の社会』岩波書店.
- 佐藤俊樹 1996 『ノイマンの夢・近代の欲望』講談社.
- Schannon C.E. & W. Weaver
1964 *The Mathematical Theory of Communication*, Univ. of Illinois Press. = 1969、長谷川淳・井上光洋訳『コミュニケーションの数学的理論』明治図書.
- 須賀由紀子 1998 「プレイ論からみた情報社会の表と裏」栗原孝ほか共著『情報文化と生活世界』福村出版 27-57.
- 田崎篤朗・船津衛
1997 『情報社会論の展開』北樹出版.
- 若林幹夫 1993 「メディアと社会変容」『情況』1993年7月号、情況出版 46-56.
- 矢沢修次郎 1993 「現代社会論」『新社会学辞典』森岡清美ほか編、有斐閣 399-400.

- 吉田 純 2000 『インターネット空間の社会学』世界思想社.
吉見俊哉 1999 「グローバル化と文化研究の視座」吉見俊哉ほか共著『メディア空間の変容と多文化社会』青弓社
11-45.
吉見俊哉・水越伸
1997 『メディア論』放送大学教育振興会.

●英文タイトル

About The Existence Mechanism of The Theory of Information Society

●英文要約

In this paper, being related to the plausibility structure in the world of everyday life, we deal with an existence mechanism of “the Theory of Information Society”.

Thirty-odd years have already passed since “the Theory of Information Society” was established. It has consistently informed us of the advent of “information society.” The theory has been, in other words, a “prophecy” of social changes occurring.

Our technology has certainly made remarkable progress in many fields during the last three decades, and this improved technology, including ubiquitous computing, has brought about great changes in our daily lives. Nevertheless, the theory of information society is still a subject of lively discussion. Why? Is this because our technology continues to progress? Absolutely not. In my view, the theory of information society, which was, in a way, an “outcome” of innovated technology, is founded on “premonitory symptoms of social changes” --- a vacillation of the plausibility structure by which people prescribe reality.

The purpose of the present paper is to focus on “the existence mechanism of the theory of information society.” By discussing (1) theories on modern society in sociology, and (2) M. McLuhan's theories on media, we would like to present a means to surpass those ways of thinking which are typical of many varieties of determinism, such as technical determinism.

